

徳島ペンクラブ通信 第200号

2025年(令和7年)4月15日

発行

徳島ペンクラブ

1967年(昭和42年)創刊

●徳島ペンクラブ総会開催 5/17(土)

令和7年度の徳島ペンクラブ総会開催を御案内いたします。

会員の皆様、宜しくご参加くださいますようお願い申し上げます。
今年度は五月半ばに開催いたします。初夏のすがすがしい空気に包まれて文芸を志す仲間が集い、本会の今後の方針や新しい試みについて有意義に話し合います。AIによる社会の変革があらゆる方面に及んで、人と人の関係が揺らぎそうなる時代にこそ、肌の温かみを感じられる交流が、なによりも大切と思われまふ。

今回は、役員改選の年に当たって、新理事および新役員の方々を紹介いたしますので、その御信任を頂きたく、ぜひ御足旁く下さいませ。そして何よりも、久しぶりに皆様とお会いすることを楽しみに、会員相互の親睦を深められれば幸甚です。

総会審議に先立って、本県が誇る歌謡曲、民謡等々の作詞家であられる高須 郷様(当会理事 東根泰章様)の作詞人生を振り返えられての講演『歌謡詩を作って60年』を、ご期待ください。

また令和6年度とくしまペンクラブ賞の表彰式を併せ行いますので、素晴らしい作者とその作品に拍手喝采を送りましょう。

総会は左記の式次第で予定しておりますので、講演、総会そしてその後のランチ会食に、宜しくご参加ください。

徳島ペンクラブ総会

日時 令和7年5月17日(土)

9時30分 受付開始

10時開会(総会)午後2時頃、懇親会閉会

場所 阿波観光ホテル 3Fロイヤルパレス

徳島市一番町3-16-3

TEL 088-622-5161

(本通信に徳島ペンクラブ総会案内と参加申込葉書を同封します)

式次第

1、開会の辞

2、会長挨拶

3、講演 「歌謡詩を作って60年」

講師 高須 郷様 作詞家(JASRC正会員)

徳島ペンクラブ理事

4、令和6年度徳島ペンクラブ賞表彰式

5、総会

一、新会員・新理事紹介、会規約変更の審議

二、令和6年度事業報告

三、令和6年度収支決算報告

四、会計監査報告

五、令和7年度事業計画

六、令和7年度収支予算

七、連絡事項および質疑応答

6、閉会の辞

7、ランチ会食(会食会費 3,000円)

(記、会場の阿波観光ホテルは、徳島駅から徒歩約5分、また立体駐車場があります)

●令和6年度徳島ペンクラブ賞

令和6年度刊「徳島ペンクラブ選集PART42」の掲載作品の中から、ペンクラブ会員の投票によって選出された優秀作品を、令和6年度徳島ペンクラブ賞として表彰します。

作品全体に優れた作品をペンクラブ賞とし、そのタイトル(題名)が機知に富み、インパクトの強い作品をタイトル賞として表彰致しました。文芸作品の評価は多岐にわたるため、これから最適な評価を頭わすため、いろいろな表彰の形をとってゆきたいと思ひます。なおA部門のペンクラブ賞並びに次点の作品は、徳島市民文芸集『まゆやま』に掲載され、より広く紹介されます。

・徳島ペンクラブ賞受賞作品(受賞、おめでとうございます)

A部門(散文)

徳島ペンクラブ賞

次点

タイトル賞

次点

B部門(短詩)

徳島ペンクラブ賞

次点

タイトル賞

次点

「箱膳」

吉田 徳子様

「マンハの子守歌」

竹内 紘子様

「老春ってなんだ」

東條 孝様

「クワバラクワバラ」

小川 公三様

「空から人が」

山本 枝里子様

「川柳 青い味」

黒田 るみ子様

「開けてはならぬ」

松尾 初夏様

「空から人が」

山本 枝里子様

● 第26回とくしま随筆大賞作品募集(期間4月1日～6月30日)

令和7年度 徳島ペンクラブ・徳島新聞社共催「第26回とくしま随筆大賞」の応募作品募集が始まりました。ご自分の心の思いや考えを自分の言葉で書き、人の心に伝えましょう。随筆にはパターンがありませんから、読んでわかりやすい文章であれば良いのです。どなたでも書き得る最も手近な文芸かも知れません。お友達とも誘い合って、奮って応募ください。お待ちいたしております。

【応募規定】

応募規定は次の通りですので、よくご確認ください。

- 一、応募資格 徳島県内在住者または徳島県出身者
- 二、形式 随筆・主張などの散文
- 三、内容 自由
- 四、1人1編 未発表でオリジナルな作品
- 五、書式
 - 1、文字数 400字詰め原稿用紙4枚以上5枚まで。(作品名、氏名を含む)
 - 2、各紙面右下に、必ずページ数を記入してください。
 - 3、手書き作品の場合、400字詰め原稿用紙A4サイズ横判縦書きで、わかりやすい文字で記入ください。
 - 4、作品1行目に作品名、2行目に氏名を書き、3行目から本文を書いてください。
 - 5、必ず規定の応募用紙に必要事項を明記してください。応募用紙がない場合、別紙に次の必要事項を記入して原稿に添付してください。

- ①氏名 ②電話番号 ③郵便番号 ④住所 ⑤年齢(学生、生徒の場合、学校名)
 - ⑥作品名
- (個人情報情報は、本募集に関する以外には使用せず、厳重に管理致します)

- 6、作品の言語は日本語に限ります。外国の方も日本語で応募ください。
- 7、作品は郵送に限ります。作品受領後の原稿の返却、原稿の訂正はお受けできませんので、作品発送の前に十分ご確認の程よろしくお願い致します。

- 六、作品の送り先

〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

徳島ペンクラブ「第26回とくしま随筆大賞」係

- 七、応募締め切り 2025年6月30日(当日消印有効)

- 八、入賞発表 8月下旬(予定) 徳島新聞紙上(受賞者には、直接連絡します)

(詳細は、別途、第26回「とくしま随筆大賞募集」のチラシをご覧ください)

- 九、表彰式 9月21日(日)午前10時 徳島県立文学書道館に於いて。

● とくしま随筆大賞の新しい審査員を、ご紹介いたします。

かまえ だいき

構 大樹 様

徳島ペンクラブ前会長 丁山俊彦氏のご逝去に伴い、とくしま随筆大賞最終審査員4席のうちの1席が空席になっておりましたが、この度、構 大樹先生が、快くお引き受けくださいました。心から御礼申し上げます。

構 大樹先生の御紹介

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科

国語科教育コース 専任講師

会員一同、心から歓迎いたします。よろしくお願い申し上げます。

● 初めての「文章セミナー」を開催 しました。

とくしま随筆大賞に臨まれる方々、今から随筆に挑戦される方々のために。

令和7年度「とくしま随筆大賞」作品募集を前に、令和7年3月29日、徳島県立文学書道館におきまして、随筆の書き方をはじめとする「文章セミナー」を開催いたしました。初めて随筆に挑む方はもちろん、これまで随筆に馴染んでこられたベテランの方々も、随筆とは何か、随筆の神髄、随筆への対応の仕方などを再吟味する上で有益であると思われます。このセミナーが恒常的に続けられれば幸いです。

● 受賞おめでとございます。

心からお祝い申し上げます。ますますのご活躍を期待いたします。

第19回 徳島柳壇賞 優秀賞 松尾 初夏 様
第22回 徳島文学賞 優秀賞 幸田 清子 様

俳句部門 優秀賞 竹内 菊世 様
連句部門 最優秀賞 東條 士郎 様

〃 優秀賞 鎌田 明日侖 様
二橋 満璃 様

早見 敏子 様

関 真由子 様

(記、各種コンクールで優秀賞以上を受賞された方は、是非お知らせください。)

●徳島ペンクラブ選集Pt.43 作品募集 始まります。

【会員一般作品】

令和7年度の徳島ペンクラブ選集会員作品の募集を致します。できるだけたくさんの方のご応募をお待ちしております。複数の作品もどうぞご遠慮なく。よろしくご活躍ください。

【募集要項】

1、原稿
散文作品 随筆、評論、短編小説など。
韻文作品 俳句、川柳、短歌、連句、現代詩、漢詩ほか。

2、テーマおよび作品の応募方法

・テーマ 自由とします。必ずタイトル(表題)を明記してください。

・応募は400字詰め原稿用紙を基本とし、原稿には必ずページ数を記入してください。手書き原稿の場合は、必ずコピーを2通とり、そのうちの1通と本稿とをお送り下さり、残る1通をご自身の控えとしてください。

・原稿受取り次第 その旨 確認の電話を致しますので、必ず電話番号をご明記ください。ご投函後、2〜3日たつても、原稿受理の連絡がない場合、お手数ですが、確認のため編集担当者にお電話ください。

※ 原稿をパソコンメールでお送りいただけると、後の編集がおおいに助かります。メールご使用の方は、ぜひご協力ください。

3、原稿締め切り 2025年(令和7年)9月末日(必着)

4、原稿送付先(編集担当)

〒771-4262 徳島市丈六町長尾62-15

関 真由子 宛

E-Mail mayu0204@ma.pikara.ne.jp

Tel. 088-645-1840

5、作品の掲載負担金について

見開き2ページで負担金8,000円、追加1ページ毎3,000円加算させて頂きます。時節柄、何卒ご協力ください。

【丁山前会長の追悼文】

掲載無料

長年本会に尽くされて会の発展に邁進され、本県の文学発展に並ならぬ尽力をされた丁山俊彦前徳島ペンクラブ会長は、会長・就任中に病に倒れられ、薬石の効なく不帰の人となりました。ここにこれまでの御恩義を表して、会員各自の心からの追悼文をお寄せ頂きたく、よろしくご協力お願いいたします。(次段つづく)

(前段から)

文面は自由ですが、表題、氏名を明記の上、文字数を、300字以上500字以内に纏めてください。なお、この追悼文の掲載は無料です。

追悼文締め切り 2025年(令和7年)9月末日(必着)

(徳島ペンクラブ選集の一般作品と同じ締切日です)

追悼文送り先

〒770-0865 徳島市南末広5番70-606

山口 久雄 宛

E-Mail tng1701@nifty.com

Tel. 088-624-1187

●爽やかな秋風と共に 秋の文学散歩 予定しています。

秋の文学散歩が10月初旬に計画されております。昨年度の徳島新聞社印刷センターの見学会は、活字印刷の時代を生きた面々には、目を見張ることばかりで、非常に有意義な経験でした。本年度も意義深く楽しい文学散歩を計画致したいと思います。計画確定次第、次号(通信第201号)でお伝えいたします。今回は屋外に出て、秋の空気の中で、徳島市渭北地区の文学史蹟をめぐる散策を念頭に計画しております。皆様、奮ってご参加下さり、徳島の隠れた文学跡を楽しみつつ、爽やかな秋を満喫しましょう。

●ひとりごと欄

「私のおすすめの逸冊」

編集子

昨年度の県民文化祭のテーマは「私のおすすめの一冊」であったが、編集の当初、どこからともなく、「一冊」ならぬ「逸冊」なる単語が何かの風に乗って流れ込んできた。当然慌てる。数冊の辞書で調べたが、……ない。どこにもない。もともと逸という漢字は「時期を逸する」というように、「失う」「誤る」「逃げる」などの後ろ向きの意味合いに用いるが、ここが言葉の不思議なところで、たくさん語釈の中に「チョコツと」「優れている」という意味があつて、逸材・逸文・逸物の単語を用意してある。すると「逸冊」とは、優れた書ということになるのだが、今までの長い人生で目にしたことはない。果たして実在の言葉だろうか? 「逸」のように、同じ文字でも全く異なる意味を持つことは漢字以外にもある。まして、あの広大な国土に長大な歴史と多民族を擁する中国で、言葉の意味合いが全く異なつて当然である。ここで持つべきは真摯な友や同胞である。当惑する私を見兼ねて、たちまち調査を始め、「逸冊」は神奈川県内やその近在の書店でのみ頻用されている単語であると教えてくれたのである。「最近読んだ逸冊」「逸冊レビューコーナー」とか「スタッフの今月の逸冊」などなど。言葉は臨機応変に造語して然るべきで、それを取捨選択するのも、発展の一つなのだ。これは、文化祭イベントでの大きい利得となった。「二冊」の語呂合せになつていいるのも面白い。

リレーエッセイ

高知県の銘菓

「土佐日記」について

喜島政行

高知市大津乙の株式会社青柳が「土佐日記」という菓子を販売しているが、そのパッケージには紀貫之が土佐に赴任するにあたって認めた「土佐日記」の冒頭の一句が書かれている

「をとこ毛数といふ日記といふ物をむなも志て心みむとてする」

これを読んで「おや」と思った人がいるだろう。実は私も「おや」と思ったひとりだ。自分の記憶する冒頭の一句とは微妙に違っている。私の記憶では、

「をとこもすなる日記といふものをむなもしてみんとてするなり」だ。

銘菓「土佐日記」では、「男もすといふ」私の記憶では、「男もすなる」

大した違いではないが、口調が違っているのて発音すると調子が外れてしまう。

種を明かせば、これは、定家本と為家本の違いなのである。紀貫之の「土佐日記」原本は失われており、いくつかの写本が元の文を知るための手がかりとなっている。

このうち最も信頼が置けるとされているのは為家本である。その次が定家本。定家とは、言わずと知れた藤原定家で、為家は定家の子である。

では何故(株)青柳の「土佐日記」は原本に最も忠実といわれる為家本を採用せず、定家本をその商品デザインに採用したのだろうか。これも種を明かせば簡単なこと

とである。銘菓「土佐日記」は1954年(昭和29年)から販売されており、当時の最も信頼できる写本は定家本だったからである。

為家本が発見されたのは1984年(昭和59年)。実に「土佐日記」発売から30年後のことである。ウィキペディアによれば、為家筆本は長らく行方不明であったが、1984年に反町茂雄の古書店「弘文荘」に持ちこまれて為家本と確認されたという。そして、7,500万円で大学図書館に売却され、現在「大阪青山歴史文学博物館」に蔵せられている。

このため、銘菓「土佐日記」には発売当初流布していた定家本の句が記されていて、(株)青柳は、為家本発見の後にも頑なに定家本の表記を続けているのだ。その理由はおそらく、昭和29年発売という、為家本発見よりも30年も前に発売された超ロングセラー商品であるということ、を、ことさらに強調するためなのではなからうか。

そのせいで、私は「おや」と首を捻り、その理由を知りたくなったのだから。そして日本全国にも、この銘菓を手にして「おや」と思い、私のようにその小さな謎を解こうとした人はたくさんいたに違いない。

参考(ウィキペディアより)

為家筆本(大阪青山歴史文学博物館蔵国宝)・嘉禎2年(1236年)書写「1」。長らく行方不明であったが、1984年に反町茂雄の古書店「弘文荘」に持ちこまれて為家本と確認され、7500万円で大学図書館に売却された

ほんの散歩道 《出版の際は二報ください》

—阿波の歴史小説—

阿波の契りのものがたり

阿波の歴史を掘り起こして「師匠と弟子」「藩主と家来」「武士と僧侶」「叔父と甥」「主君と家臣」の契りなど、「契り」によって生まれた「ものがたり」を会員がそれぞれ綴りました。お楽しみください。また「阿波の歴史小説 読書感想文コンクール」も、第十回目になります。心に残ったこと、感じたことなどお気軽に綴ってぜひ応募ください。

B5判312ページ
定価1200円＋税

発行 阿波の歴史

を小説にする会

発行者 鈴木 綾子



連句集 花音 11

今号は十八種の形式を試みている。長いもので百韻、短いもので十三行、多種多様の形式で、詩情を模索してみた。非売品

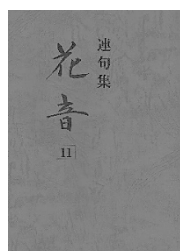
A5判211ページ

編者 東條 士郎

発行 三輪 和

印刷

原田印刷株式会社



短歌甲子園を目指して

—短歌甲子園プロジェクト—

全国で盛んに行われている「短歌甲子園」に徳島県からも参加するべく、中学生や高校生に呼び掛けて、初めて出版した合同歌集

A5判139ページ

非売品

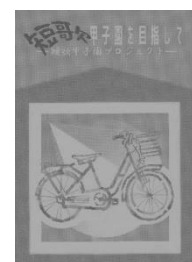
編集・選歌 松田一美

発行 短歌甲子園プロ

ジェクト

印刷

原田印刷株式会社



いわし雲売ります

この句集は、俳人 山之口ト一が俳句結社「風韻」に参加以来今までの俳句人生を通して、凡そ600句の中から、334句を厳選し、それを抱卵期、揺籃期そして黎明期に3区分して集大成したもので、その成長の過程が偲ばれる。

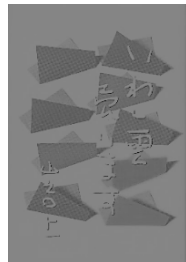
四六判188ページ

私家版

著者 山之口 ト一

印刷

原田印刷株式会社



あとがき

「継続は力なり」とは、明治から昭和にかけて広島で活躍した教育者・求道者であった住岡夜光の「替嘆の詩」の一節であるという。「徳島ペンクラブ通信」は、今回で200号となったが、どのような意義や啓発を發揮し、力を得たであろうか。会と会員間の連絡の用だけでなく、もっと密度の高い使命が望まれているのではなからうか。紙数にこだわらず会員の自由な手記を掲載して、本通信を、文による会員間の交流の手段・掲示板の役割をも担い、意思疎通を高め、ともすれば沈滞しがちな文芸活動を活発にし、ペンクラブ全体を發揚できればなどと、空想的希望を描くのであるが。

編集子